

マスメディアの中の小説家

——〈新聞小説家〉としての石川達三——

山 本 幸 正

一 石川達三の「妖気」

石川達三といえば、「蒼氓」(『星座』、一九三五年四月)で第一回芥川賞を受賞したことで知られている。また『中央公論』一九三八年三月号を発売頒布禁止処分に近いこんだ「生きてゐる兵隊」は、文学史上登録済みの作品だ。この二作以外にも、戦前から戦後にかけて石川が、幅広い視野を兼ね備えた社会小説を量産し続けたことは周知の事実となっている。しかし、そうした石川に「妖気」が漂っていたことは、もはや忘れ去られてしまったのではないだろうか。

一九五六年十月二十九日の『読売新聞』夕刊に載った「マス・コミ」欄に、次のような記述がある。

アジアにかえれ、と、石川達三がまた一発空気銃をぶっぱなした。なんの新味もないし、もう日本の「進歩的」知識人たちの標語のようなものもあるが、石川が一発すると一まつ妖気がたぎよう。それほどわが石川は時の人気スターなの

である。

この記事が掲載される六日前、二十三日の『読売新聞』夕刊に石川は「これからの日本」と題したエッセイを発表していた。「もはや日本は英米崇拜主義を一擲して、欧米依存主義を放棄して、アジアの一隅にある小国という謙虚な自覚から再出発しなくてはならない」という持論を述べたもののだが、「マス・コミ」欄が揶揄しているように、当時としても「なんの新味もない」ものだった。しかし中身に新鮮味がなくても、石川達三という名が冠せられるやいなや「妖気」が立ちこめたいらしい。この時期、石川の発言は、たとえ取るに足りない凡庸なものであったとしても、「妖気」を身にまとい問題として取り沙汰せざるを得なくなっていたのである。

あらためて確認するまでもなく、石川達三は『結婚の生霊』(新潮社、一九三八年十一月)以来、戦前から戦後にかけてベストセラーを生み出し続けた流行作家だった。とりわけこの記事が書かれた一九五五年前後、石川は「新聞小説家」として確実な愛読者を持つ

てゐる数少い作家」とみなされていた。野口富士男も『感觸的昭和文壇史』（文藝春秋、一九八六年七月）で、一九五五年頃を「文学が一般社会との親密さを所持していた」時代だったとふりかえりながら、次のように記している。

そう言えば、車体に「吉川英治『新平家物語』」などと大書した新聞輸送用のトラックが街頭を疾駆していた光景も思い出される。吉川ばかりではなく、石坂洋次郎、獅子文六、石川達三、大佛次郎、海音寺潮五郎、村上元三、松本清張らの連載小説が新聞販売促進のメダマ商品だった時代も、今は過ぎ去ってしまったのである。

ここで野口が名を挙げている小説家たちは、みな押しも押されもせぬベストセラー作家として知られていた。しかし彼ら全員に、先の「マス・コミ」欄が指摘していたような「妖気」が感じられたかという疑問が残る。全国紙に「これからの日本」という大仰なタイトルのエッセイを発表してしまい、「妖気」すら感知させてしまうことができたのは、おそらく石川達三だけだったのだろう。ほぼ同時期に大宅壮一は、「石川達三は、今日の文壇で一種の流行作家になっている。一種の」というのは、他の流行作家とはちよつとちがつっているからだ」（『現代の魅惑』、現代社、一九五七年三月）という証言を残している。大宅によれば石川は、石坂洋次郎、獅子文六、大仏次郎、舟橋聖一、丹羽文雄など「誰でも文句なしにあげる人気作家」とは異質の流行作家だったのだ。「マス・コミ」欄が指摘していた「妖気」も、その「ちよつと」の違いに由来するものだったのではないだろうか。明敏なジャー

ナリストでもあった大宅は「マス・コミ」欄と同様に、この時代の石川達三がたんなるベストセラー作家の範疇を超えた「時の人気スター」だったと述べていたのである。

すでに一九五一年の段階で山本健吉は「現代作家論 石川達三」（『群像』、九月）を書き、石川達三は「現代の日本文学のもつとも顕著な一つの現象」であると記していた。くわえて山本は、「石川氏の作品にもつと深くつき合つて、相手のインキ壺からその肖像を描き出すインキを借りてくるやうな操作に、私は大して期待と興味とを持てなかつた」と書いている。この山本の示唆を、あらためて見直すべきではないだろうか。もちろん石川の作品を精緻に読解していく、その現代的な意義を見出したりあるいは限界を剔抉したりすることは、可能であるし必要なことでもあるにちがいない。たとえば生誕百年を記念して「石川達三の世界」を特集した『国文学 解釈と鑑賞』（二〇〇五年四月）には、そうした試みのいくつかが収められている。しかし個々の作品の可能性に拘泥しては、その時代に感じられた石川の「妖気」、あるいは「現象」としての石川を捉えることはむずかしくなってしまう。したがって本稿では石川達三を、同時代のメディアにおける「現象」という観点から見えていき、その「妖気」と呼ばれたものの一端をあきらかにしていきたい。またいうまでもなく、その試みは、戦後のマスメディアと小説家の関わりの一側面を考えることにもつながっていくことになるだろう。

二 『望みなきに非ず』と新聞小説の戦後

誰もが言うように、石川達三は流行の《新聞小説家》だった。では石川はいつから《新聞小説家》になったのだろうか。

もちろん石川は『人生画帖』を皮切りに、戦前から新聞小説を書き続けていた²⁾。しかし新聞小説を書いたからといって、小説家が《新聞小説家》として認知されるわけではない。戦後でいうなら、たとえば大岡昇平も武田泰淳も三島由紀夫も新聞小説を書いている。しかし彼らを《新聞小説家》とのみ捉えることはできない。新聞小説も書く小説家と《新聞小説家》は似て非なるものなのである。

戦後における石川の新聞小説は、敗戦から二年後、一九四七年七月から『読売新聞』で連載された『望みなきに非ず』にはじまる。公職追放の身である元海軍大佐を主人公に、「民主革命」や「女性解放」に浮かれる世相を皮肉った『望みなきに非ず』は、新聞社の期待通りに大きな反響を呼んだ。たとえば『思想の科学』は、一九四九年三月号で「新聞小説の分析と批判」を特集し、「望みなきに非ず」合評会」と研究部編「望みなきに非ず」を通じて見た「人々の哲学」を掲載した³⁾。後者の「序」には、『望みなきに非ず』が与えた反響が簡潔に次のように記されている⁴⁾。

この小説は、昨年七月一六日より十一月二二日迄、読売新聞に連載された新聞小説である。その後、一二月廿日にわ、単行本として読売新聞社から発行され、直ちに再版が出ると云う程によく売れたのである。又、最近になって、新東宝に依

り映画に製作されると云うし、八月四日からわ新生新派と水谷八重子に依り、東劇で上演される。ラジオ・ドラマとしても既に放送された。と、こう見ると、「望みなきに非ず」と云う小説は終戦後に発表された文藝作品中で最も多くの読者、聴衆、観客を持ったものの一つであり、思想調査の材料としてわ非常に珍しい絶好の実験条件を備えたものと云うことになる。

「一般の人の日常生活の中に生きている哲学思想」を調査するにあたり、そのサンプルとして『望みなきに非ず』が最も適当なものだったといえよう。残念ながら調査は、読者の理解能力を問うはじめての試みでもあったため集計後に「種々の失敗」が明るみになり、結果も「最も端的明瞭なもの」だけしか掲げられていない。とはいえ研究部のはじき出した結果は興味深いものだった。たとえば「この小説は、日本の現状をよく写していると思いますか？」という質問に対し、「全体の七〇%と云う多数が此の小説を是とし、現実をよく描写していると思っている」という結果が出た。それは「望みなきに非ず」合評会」で出された見解とは、まったく反対のものだった。研究部は「座談会の学者階級の人達にとつてわ此の小説は現実と非常にかげはなれたものであつた。此の事わ一般読者階級と学者階級との間にわ完全なる断層がある事を示している」とまとめている。ここで指摘されている「断層」は、たとえば正宗白鳥の評にも認められるものだ。『望みなきに非ず』は「この頃の新聞小説の中で最も面白いといふ評判」だから連載

終了直後に「切抜きを集めて一氣に通読」したという白鳥は、「石川達三論」(『中央公論』、一九四八年一月)で、「かういふ作風は上つ面だけの社会描写で底の浅いものになる恐れのあることは明らかである」と疑義を呈した。白鳥の評は、まさに座談会で出た評価と軌を一にするものだった。新聞小説『望みなきに非ず』は学者や文壇関係者にでなく、あくまでも「一般読者階級」に受け容れられた作品だったのである。

しかし注意すべきは、石川本人も『望みなきに非ず』の出来栄に満足していなかったということだ。「望みなきに非ず」について(『風雪』、一九四八年二月)には、「対世間的には成功した」けれども「現代風俗のスペクタクル」に墮しており、作者自身としては「成否相半ば」というところだと自嘲気味に書かれていた。しかもこのエッセイで石川は、「新聞小説は有能な作家をスポイルする」と憤っている。「新聞社が要求するのは芸術的価値ではなくて、読者の人気と営業的利益」にすぎないため、「多くの場合、皮相な描写に終つてしまふ」からだ。もちろん同人誌として発足した『風雪』に掲載されたエッセイであるということを考慮する必要があるが、この時期の石川はやはりどこかで新聞小説を軽視していたのだろう。『望みなきに非ず』の作者は、自分を「新聞小説家」とはみなしていなかったのである。

ところで『望みなきに非ず』を連載した『読売新聞』は「終戦後いち早く連載小説を提供してきた」という自負を抱いていた。その『読売新聞』は『望みなきに非ず』が絶賛を博した後、いっそう新聞小説に力を入れるようになる。一九四八年六月十七日に

告知された「読売新聞小説賞」は、そうした傾向を端的に示すものだった。石川は、正宗白鳥・吉川英治・大仏次郎とともに選考委員に名を連ねた。結局第一回の小説賞は当選作なしという結果に終わったが、この企画は新聞小説をジャンルとしてあらためて確定する役割をはたした。その募集要項には「今日までに築きあげられた『新聞小説』を更に文学の一ジャンルとして確立するために、『読売新聞小説賞』を設定」したと記されており、求められているのが「単なる『懸賞小説』ではなく、『新聞小説』である旨がぐりかえされている。また六月二十一日の紙面には各選考委員の応募者に向けてのメッセージが大大的に載せられているのだが、その見出しは「文学の新分野 新聞小説」となっていた。さらに選考後に石川は、選考委員を代表して「新聞小説について」(『読売新聞』、一九五〇年一月二十三日)を書き、読者層が広く制約も多い新聞小説は素人にはむずかしい分野だと論じていた。新聞小説は特別な分野として確認され続けていたのである。もちろんこれ以後も読売新聞小説賞は続いていき、『読売新聞』には毎年必ず新聞小説論が掲載され、新聞小説を書くための心構えやテクニクが論じられるようになった。新聞小説は、まだまだ開拓の余地のあるひとつのジャンルとして認知されていたのである。

こうした趨勢の中、石川は一九四九年四月から『毎日新聞』で『風にそよぐ葦』の連載をはじめた。戦時下の言論弾圧、とりわけ横浜事件を扱ったことで知られ、石川の社会小説の代表作ともなった作品である。世評も高く、たとえば小田切秀雄は「新聞小説についての夢と現実と」(『世界評論』、一九五〇年二月)で、新聞

社の意向に囚われまいとする「作家的な勇氣」が示されていると賞賛し、政治評論家の山浦貫一も「健全なる家庭」の「神聖な規律」を乱す小説ばかり掲載する新聞社に怒りを露わにしつつ、「望みなきに非ず」と『風にそよぐ葦』は「立派な政治小説」で「凄く面白かつた」という。⁹⁾『望みなきに非ず』に否定的だった正宗白鳥ですら、石川の作品に「広く現実の世界に生きんとする意欲」を読み、「時代を反映して、右往左往している現代文学の姿を、私は、誰のよりも、石川の作品において見るのである」と書くに至った（『現代作家論 意欲的な石川達三』、『読売新聞』夕刊、一九五二年六月三十日）。しかし石川自身は『風にそよぐ葦』を連載している最中に行なわれた座談会で、やはり新聞小説という形式は好きではないという発言をしている。¹⁰⁾脚光を浴びていた新聞小説というジャンルで、石川は「一般読者階級」からだけでなく、プロフェッショナルな文学者や「学者階級」からも高い評価を与えられるようになっていた。しかし石川本人としては、『風にそよぐ葦』を書いた段階でも、みずからを「新聞小説家」とみなすに至っていない。石川達三という小説家が〈新聞小説家〉に変貌するには、もう少し時間が必要だった。おそらく一九五三年九月から『読売新聞』で連載のはじまった『悪の愉しさ』とともに、転機がやって来たのである。

三 『悪の愉しさ』から『四十八歳の抵抗』へ

『風にそよぐ葦』の後、誰もが石川達三を〈新聞小説家〉と認めるようになっていた。たとえば亀井勝一郎が「新聞小説の名手

としては、獅子文六、石川達三、石坂洋次郎氏らが定評がある」（『新聞小説について』、『読売新聞』、一九五三年十一月十五日）と書いているように、石川自身の自己認識とは関係なく、石川は代表的な〈新聞小説家〉として必ず名前をあげられる存在になっていた。しかし『悪の愉しさ』以降、誰もが口を揃えて、石川はたんなる「新聞小説の名手」ではなくなったと言うようになる。一作ごとに新聞小説というジャンルを刷新し続ける〈新聞小説家〉の異端児とみなされるようになっていったのである。

新聞小説には制約が多い。毎日約三枚半の分量を十五字詰め的小さなスペースに掲載し続けなければならず、また「百万人の文学」といわれるように、週刊誌などくらべても、相手にしなければならぬ読者は莫大だ。しかも読者の階層は種々雑多で、文学作品を読み慣れないひとも多い。そしてなによりも、彼ら読者にとって新聞小説はオマケにすぎない。小説目当てに週刊誌や雑誌を手にとる読者は多くても、小説を主要目的に新聞を購読する読者はほんのわずかだ。新聞の読者は面白かったら新聞小説を読むけれど、つまらなかつたり読む気を起こさなければ黙殺してしまふ。¹¹⁾そうしたわがままで楯外れに多くの読者を相手にしなければならぬから、たとえば丹羽文雄は「新聞小説作法」（『読売新聞』、一九五四年三月十八日）で、「あまりべつたりと活字を埋めることは、読者を虐待するものと思っている」と述べ、読売新聞小説賞に応募しようとするアマチュアたちにアドバイスを贈った。しかし丹羽は、そうした新聞小説の常套手段を顧みない例外的な〈新聞小説家〉がひとりいるという。「べつたりと書いて、

読みづらからうといっこうに構わない作家」もいたのだ。丹羽によれば、それが『悪の愉しさ』の石川達三だった。

石川は新聞小説への果敢な挑戦者となったのである。『悪の愉しさ』は「従来の新聞小説の定石に対し、強引な挑戦をやつてのけ、可なりの成功を収めた」（『読売新聞』、一九五四年十一月二十日）と評価され、『自分の穴の中で』は「今年の新聞小説の収獲」であり、「当代無比の常識家石川達三が、新聞小説の常識を無視して、文学的腕力」ともいうべきものをふるった連載小説」（『読売新聞』、一九五五年十二月二十二日）とみなされた。そうした石川評価をまとめてみせたのが、『四十八歳の抵抗』の連載が終了した後、小田切秀雄が書いた「石川達三の拓いた領域 新聞小説の新動向」（『日本読書新聞』、一九五六年六月十一日）だった。小田切は次のように述べている。

『悪の愉しさ』や『自分の穴の中で』からこんどの『四十八歳の抵抗』に進んできた石川達三の歩みは、日本人のきわめて多くのひとびとがその心内の暗い部分にひそめているエゴとその生命力充足への要求や衝動を、マス・コミュニケーションの一部分としての新聞小説のなかに引きだし展開したという点では新聞小説およびマス・コミュニケーションの新しい領域をひらいたものといわねばならぬ。

小田切が指摘するように、『悪の愉しさ』から『四十八歳の抵抗』に至るまでの間に石川が追求したテーマは、ほぼ共通していた。それは「退屈」な日常に飽きたあぐけ、小さな「悪」という冒険を求めることの意味である。だまして「友人の妻の肉体」や「未

亡人の肉体」を手に入れたり、ヌード写真の撮影会に赴いたりすることで、彼らは日常からの脱出を試みる。十返肇も新潮文庫版『自分の穴の中で』（一九五八年三月）の解説で述べているように、「新聞小説の主人公に背德的悪人を使用した」ところに、石川の新しさがあった。

小田切の評価は決して過大なものではなかった。新聞というマスメディアで「悪」を主題に小説を発表し続けることは、無謀ともいべき試みだったらしい。中村光夫が「新聞と小説」（『文学界』、一九五三年二月）で指摘しているように、新聞の読者は「保守的人間」だったのであり、彼らは自分の「価値の体系をくづされたり、人生観をゆすぶられることは堅く拒否」する。そうした読者を相手に、説得力のある「悪」を提示することは至難の業だったにちがいない。事実、『悪の愉しさ』にはたくさんの批判的な投書が寄せられたという。石川本人が、それらの投書に応えて「生きている悪徳」「悪の愉しさ」への批判について」（『読売新聞』、一九五四年二月二十二日）を書かねばならなかったくらいだ。

しかし石川は、莫大な新聞読者を相手にナイーブに「悪」を物語ったわけではない。自分が相手にすべき読者を、「石川はしたたかに計算していた。石川が戦略的に自分の読者として召喚したのは、次のような新聞読者だったにちがいない。

朝食がすむと、バジヤマのまま縁の柱にもたれて、中根は新聞をひらいた。世間の波、人間の波が、紙面からどと押し寄せてくる。人間のあらゆる悲劇が、ここに集積されていく。

再軍備の問題……彼は別に興味もない。

凶作と食糧対策の問題……もう何遍も聞かされて飽きている。

朝鮮問題、国連問題……何をしているんだか、ちつとも解らない。

金融梗塞、投資相談、出血受注、中共貿易……縁のないはなしだ。

戦犯帰国問題……まだそんな人が居たのか。

職業野球の勝敗、大学対抗ラグビーの結果、駅伝競走。これは丹念に読む。それから米国音楽家の来朝、ジャズの新番組、映画物語を読む……書評の欄、宗教と文化の欄は飛ばして、殺人強盗犯人逮捕さる。読んでみて、馬鹿なやつだと思った。十代の性教育。これはじっくりと読む。赤線区域の探訪記事。これも面白い。漫画を見て、身の上相談。私は四十二歳の未亡人です。ちかごろ二十二歳の甥に慕われ、ふとした事からついに越えてはならぬ一線を越えて、……馬鹿ななあ、黙っていればいいじゃないか。

子供は床の上で手をしゃぶっている。有貴子は爪楊枝を啜えて食器を洗っている。彼女は新聞を読まない女だ。

『悪の愉しさ』の一節で、主人公のサラリーマン・中根玄三郎が「退屈な日曜日」を過ごす場面の冒頭部だ。「平凡」で「退屈」な家庭や会社には飽き飽きしているサラリーマンの休日が見事に描かれている。中根は「退屈な日曜日」を紛らわすために新聞を手にとる。彼は天下国家の問題には無関心だ。スポーツやジャズ、映

画、そしてとりわけ「十代の性教育」と「赤線区域の探訪記事」に興味をいだく。石川が自分の読者として想定していたのはこのようなサラリーマン、すなわち決して高潔などではなく、消費社会の欲望にまみれたあくまでも「平凡」なサラリーマンだったのであり、あるいはそうしたサラリーマンに関心を寄せてしまう読者だったのだろう。それに対し中根の妻・有貴子のような「主婦」を、石川は読者とは考えていなかった。「主婦」に感情移入してしまう読者は、石川の範疇からは排除された。だから有貴子は「新聞を読まない女」として造形されたのである。また「四十八歳の抵抗」の一節も見てみよう。主人公の西村耕太郎がわびしい昼食をとる場面だ。

赤い豚肉を上にした中華蕎麦一杯。それだけではあまりに可哀相だ。労働者だってその位のは食べる。西村耕太郎は火災保険部の次長である。せめて次長の体面を保つために、野菜スープを別に注文した。これもまたさと子の知らない散財である。女房の知らない所で金を消費することに、多少の腹いせを感じ、多少の自由を感じる。まるでさと子は敵みたいだった。

妻を「敵みたい」に思いながら野菜スープというちんけな「悪」で腹いせをし、労働者から自分を差異化することを試みるサラリーマン。石川のターゲットは、そのサラリーマンに共感できる読者だった。

石川は「百万人の文学」といわれる新聞小説において、百万人の読者を獲得しようとは考えていなかった。だから石川は、新聞

小説のそこそこで読者の選別を試みる。新聞を読む男／新聞を読まない女、通俗的な記事に興味を持つ読者／持たない読者、サラリーマン／労働者、会社で働く夫／主婦……こういった二項対立をそれとなく仕掛け、その上で石川は、マジヨリテイと想定される側に常に照準を合わせる。石川が戦略的に取りこもうとする読者は、あくまでも二項対立のうちのマジヨリテイの側の存在（あるいは、その存在に関心を抱いてしまう人々）だったのである。

マジヨリテイに向けて石川は「悪」を物語る。しかもその語り方は、周到に練り上げられたものだった。安部公房は「石川達三論」〔文芸、一九五六年九月〕で、石川の小説には「主人公のモノローグ」が多いが、それがいつのまにか「作者の肉声」になっていると述べていた。この指摘は、貴重だ。石川の新聞小説にあつては、「作者の肉声」は「主人公のモノローグ」と溶け合い、読者はいつのまにか「主人公の思想ではなく、作者自身の思想」を読まされることになる。たとえば『悪の愉しさ』の次のような一節で、そのことを確認しておきたい。主人公の中根が妻・有貴子の浮気を疑って、有貴子の引き出しをあさっている場面である。

もしも彼が妻の不貞の確証を握ることができたとすれば、彼の孤独はますます深まり、救い難い窮地におとされることになるだろう。（A）それが解つて居りながら、しかも彼は妻の秘密を探しているのだった。（B）それは妻を弄ぶことであり、同時に彼自身を弄ぶことでもあった。（C）彼は自分自身を信じていなかったのだ。そして自分の孤独を知らない男だった。（傍線は引用者による）

この引用箇所を含むシークエンスで語り手は、妻の引き出しを荒らししまわる主人公の中根に一貫して焦点を合わせている。だから引用箇所の前から読み進めてきた読者は、この箇所も中根の心内語と捉えて気にすることなく読み進めてしまうだろう。しかしよくよく読み返してみると、そうでないことが明白になる。傍線を付した（A）までを中根の内面の言葉とみなすことに異論はあるまい。しかし（B）になると、「彼自身を弄ぶこと」になることを中根自身が意識しているのかどうかは曖昧になる。さらに（C）になると、あきらかに「作者の肉声」が響く。「自分の孤独を知らない男」とは、「悪」を遂行する中根に対しての「作者自身の思想」であり価値判断になっている。何気なく読んでいく読者は、いつしか「悪」を突き放す「作者」の「思想」に感染してしまうことになるのである。

読者を選別し、みずからが読者と想定した人々に自分の「思想」を滲透させる方法を編み出したとき、石川達三は自他ともに認める『新聞小説家』になったのである。だからであろう、先に取り上げた「生きている悪徳」「悪の愉しさ」への批判についてにおいて、『悪の愉しさ』を批判する読者に応える石川は自信に満ちている。「読んで憤りを感じる人たちのうちの何割かは、自分の心のなかにある不潔や不道徳にさわれるのがいやなのだ」、すなわち「悪」は自分の作品にあるのでなく、あなた方読者の心にひそんでいる。このように言い切る石川に、もはやためらいは見られない。

そもそも石川は「書くことの社会的な意義がはっきりしなくて

は、作品に着手できない」(『経験的小説論』、文藝春秋、一九七〇年五月)小説家だった。石川にとつて重要だったのは、作品の「芸術的価値」ではなく、その「目的」だった。しばしば指摘されるように、啓蒙家に近い志向を持っていたのである。したがって莫大な読者を抱える新聞という媒体は、石川にとっては理想的だった。みずからが理想とする「社会的な意義」を多くのひとに伝達し得る新聞は、まさにお誂えのメディアだったはずだ。しかし石川は〈新聞小説家〉にはなりきれないでいた。なぜなら新聞小説には制約や束縛が多いし、たとえば当時読売新聞社に所属していた高木健夫が述べているように「作家は、新聞にツツキモノを書く。ということになったその刹那から、『中略』巨大な商業主義の歯車のひとつ」にすぎなくなってしまうからだ。企業の言いなりになることは、石川の自負心が許さなかった。すでに確認したように、『望みなきに非ず』の直後に書かれたエッセイ「『望みなきに非ず』について」には、そうした石川の姿がはっきり示されていた。しかしそういった新聞小説の束縛や制約に囚われずに書けるようになったとき、新聞は石川にとって格好の舞台へと変容した。石川は述べている――「新聞社のためではなく、自分の本にまとめた後の方が大切であった。だから私はできるだけ自分の本の為に書いた。新聞は発表の舞台を拝借しただけであった」(『経験的小説論』)。こうして石川は新聞というマスメディアを自家薬籠中のものにしたのである。

四 〈新聞小説家〉から文化人へ

「保守的」な新聞読者を相手に「悪」を書くという「挑戦」を石川は、選別した読者に向けて自分の「思想」をそれとなく滲透させる語り口を駆使することで、見事に成功させた。その時石川達三はマジヨリテイに支えられている〈新聞小説家〉と化した。『読売新聞』の「マス・コミ」欄が指摘していた石川の「妖気」、それは自分の背後には「百万人の文学」のマジヨリテイがひかえているという自恃によって醸し出されたものだったのである。新聞小説というジャンルの開拓者は、みずからの「思想」を伝達する巧妙な手法を操り、啓蒙的な〈新聞小説家〉という地位を手に入れたのだ。〈新聞小説家〉は、新聞読者のマジヨリテイを従えて発言し続けた。事実、『四十八歳の抵抗』の連載が終了し、その単行本がベストセラーに名を連ねるようになった後の石川は、小説家というよりも、さながら新聞や雑誌というマスメディアの中を自在に泳ぎまわる啓蒙的な文化人めいていた。

『四十八歳の抵抗』の連載が終了した直後から、石川はアジア連帯文化使節団の団長として東南アジアやヨーロッパ、さらにソ連と中国を訪問した。その時の見聞、特にソ連と中国での経験をふまえて、資本主義社会の過剰な「自由」を批判した「外遊断片」(『読売新聞』夕刊、一九五六年七月十一日、十八日、二十一日)と「世界は変わった」(『朝日新聞』夕刊、一九五六年七月十一日～七月十五日)は、「論壇に異常な反響をもたらした」(『毎日新聞』、一九五六年九月二十七日)のだった。また翌年の一月二十二日には、谷崎潤一

郎や川崎長太郎などの作品を猥褻だと難じた「自由の敵」を『東京新聞』に発表し、言論の自由の行き過ぎを諷めたため、これまたセンセーショナルな論争を巻き起こした。⁽¹⁶⁾しかし論壇や文壇を敵にしても、石川は動じることはない。評論家の「特権的な意識」を難詰し、自分は「進歩的文化人」のつくる「特権社会」とは無縁だと嘯く石川は、「大衆」というマジョリティの代弁者としてふるまっている。「小説の価値を決定するものは評論家ではなくて、市井の読者であるということを考えておいていただきたいのです」(『東京新聞』、一九五七年二月十四日)と言い切る石川の言葉に迷いはない。マジョリティに支えられているという自信に満ち満ちている。

新聞というマスメディアをみずからのものにした石川達三の威风堂々とした歩みは続いていく。「読者は百万人以上であると私は信じている」とみずから豪語したという『人間の壁』の連載が『朝日新聞』ではじまるのは、一九五七年八月のことである。

注(1) 伊藤整「具体的人間―石川達三論」(『文学界』一九五三年二月)。

なお同論文は特集「新聞小説作家論」のひとつとして掲載された。

(2) 本文で参照した石川達三の新聞小説の掲載誌及び初出年月日については、以下にまとめて記しておく。

・『人生画帖』、『中外商業新報』、一九三九年十一月十九日～一九四〇年三月十八日。

・『望みなきに非ず』、『読売新聞』、一九四七年七月十六日～一九四七年十一月二十二日。

・『風にそよぐ華』、『毎日新聞』、一九四九年四月十五日～一九四九年十一月十五日。

・『風にそよぐ華(続)』、『毎日新聞』、一九五〇年七月十日～一九五一年三月十日。

・『悪の愉しき』、『読売新聞』、一九五三年九月二十日～一九五四年四月二十六日。

・『自分の穴の中で』、『朝日新聞』、一九五四年十一月四日～一九五五年六月七日。

・『四十八歳の抵抗』、『読売新聞』、一九五五年十一月十六日～一九五六年四月十三日。

・『人間の壁』、『朝日新聞』、一九五七年八月二十三日～一九五九年四月十二日。

(3) 合評会の参加者は川島武宜、南博、武谷三男、鶴見和子。学生代表として鶴見良行も発言している。なお同特集には、ほかに望月衛「青い山脈」の分析批評―大衆小説のありかたについて―が寄せられている。

(4) 『望みなきに非ず』の反響の大きさは、たとえば『読売新聞』一九四八年二月十六日に掲げられた「映画化す『望みなきに非ず』」と題した囲み記事にも見ることができる。記事は「新聞小説史上空前の絶讃裡」に完結した『望みなきに非ず』を映画化するに際し、その「理想的配役」を「広く一般読者から募集」することにした旨を告知している。実際に応募総数は、「中間発表」の時点で二二六二八通、最終的には三二八五三通に達した。

(5) 『新連載小説『望みなきに非ず』』(『読売新聞』、一九四七年六月二十四日)。実際、『朝日新聞』の戦後最初の新聞小説は一九四七年六月九日にはじまる石坂洋次郎の『青い山脈』であったし、『毎日新聞』で本格的に連載小説がはじまったのも同年八月一日から連載された林芙美子の『うず潮』だった。それに対して、『読売新聞』は、戦中の一九四四年十二月五日から敗戦後の八月二十三日まで、吉川英治『太閤記』を掲載し続けた。その後も一九四五年十一月一日からは藤沢恒夫『彼女は答へる』を掲載(十二月三十一日で中断)、以後も織田作之助『土曜夫人』(一九四六年八月三十日～十二月六

日・未完 など継続して新聞小説を掲載していた。

- (6) 確認したかぎりでは、石川は第三回読売新聞小説賞まで選考委員を務めている。

- (7) 第一回は再審査を経て、二篇に佳作賞が授与された。第二回では金川太郎『勝負師』が当選作に選ばれ、『読売新聞』夕刊（一九五一年三月十二日～五月二十九日）に連載された。しかし以後、新聞小説賞にはなかなか当選作が生まれなかった。当時読売新聞社に所属していた高木健夫は「新聞社の見た新聞小説」（群像、一九五六年十二月）で、なかなか当選作が出ず苦労していると吐露し、「七回を重ねてもまだ成功するにいたつてはいない」と嘆息している。新聞小説をプロデュースする新聞社側からの発言として、この高木のエッセイは興味深い。

- (8) 一九五〇年代前半、新聞小説をひとつのジャンルとして再確認し、考察する試みがいくつかなされていた。その代表的なものとしては、『改造』一九五一年九月号の「（座談会）新聞小説（出席者：加藤周一、手塚富雄、坂西志保、注1）でも取り上げた『文学界』の特集「新聞小説作家論」、『文学』一九五四年六月号の特集「新聞小説」をあげることができる。また石川達三も参加した『文芸』一九五四年九月号に掲載された「座談会 私の新聞小説観」でも、高見順と河盛好蔵が新聞小説はひとつのジャンルとみなすべきだと発言し、それを受けて同年八月二十六日の『読売新聞』で臼井吉見は、新聞小説が「小説の一つのジャンル（種類）だ」という高見順の反対者はまずあるまいと思うが、新しいジャンルとしての性格なり特質なりについて、いろんな面からもつつつこんで考えてみる必要がある」と指摘している。この時期、可能性のあるジャンルとして新聞小説を論じる新聞小説論議が活発になっていたのである。

- (9) 「新聞小説論」（『文学界』、一九五〇年十二月）。このように「風こそよぐ葦」は戦時の言論統制を活写したモデル小説として同時代から高く評価されてきた。しかし近年佐藤卓己は「言論統制」（中

央公論新社、二〇〇四年八月）で、そこに含まれる石川のさまざまな「嘘」や記憶の捏造をあきらかにした。

- (10) 「座談会 新聞小説について」（『中央公論』、一九五〇年十月）。出席者は石川のほかに、獅子文六、平林たい子、吉屋信子だった。
- (11) ここに記した新聞小説の特徴については、平井徳志「新聞小説の社会学的考察―その性格と要素」（『文学』、一九五四年六月）、及び『新聞小説の研究』（一九五〇年五月）を参照した。後者の冊子は「朝日新聞調査研究室報告」としてまとめられたものであり、新聞社側の新聞小説観をうかがうことのできる貴重な資料である。

- (12) 亀井勝一郎、伊藤整、臼井吉見が参加した座談会「今日の文学をめぐる」（『読売新聞』、一九五五年九月二十六日）でも、「新聞小説の一般の約束を無視」した作品として、石川の『悪の愉し』と「自分の穴の中で」があげられている。

- (13) 注(8)で紹介した『文学』の特集「新聞小説」に収められた「座談会 新聞小説と新聞」で、当時読売新聞文化部長だった赤沢正二が「悪の愉し」というのはやめろという投書がずいぶんききました」と証言している。また毎日新聞学芸部副部長にあった山口久吉は石川について「読者がいやがっているのを無理にやりますね」と発言していた。

- (14) 注(7)を参照。

- (15) 単行本『四十八歳の抵抗』は、一九五六年六月に新潮社から刊行された。ベストセラー『四十八歳の抵抗』がもたらした反響については、『文学界』一九五七年一月号に掲載された「特集」新聞小説の身上調査、及び多田道太郎「四十八歳の抵抗」（朝日選書『ベストセラー物語（中）』、一九七四年四月）がくわしく記している。

- (16) 石川達三が惹起した二つの論争、及びマジョリティの代弁者としての営為がもたらした問題点については、「新聞小説家」の意見―石川達三の「自由」談義」（『湘北紀要』第二十八号、二〇〇七年六月下旬発行予定）で論じた。